

## クロケシツブチョッキリ

甲虫目（鞘翅目）オトシブミ科



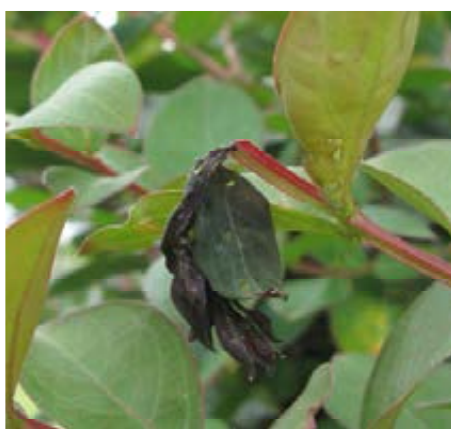
茎を傷つけられ萎凋した新梢

H23.5.6 サルスベリ



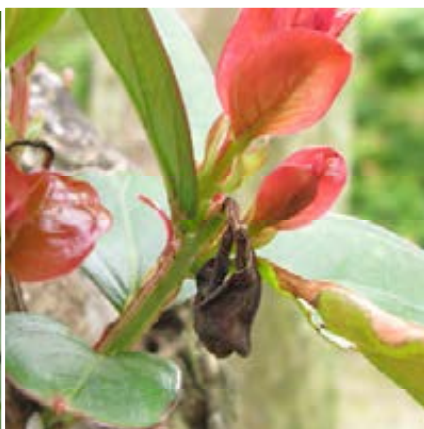
新梢の茎を傷つける本種

H23.5.9 ラズベリー



傷つけられた新梢は黒く乾固して枯れる

H23.6.24 サルスベリ



枯れた新梢は新たな萌芽により回復

H23.5.26 サルスベリ



葉を食害する本種

H23.7.1 ラズベリー

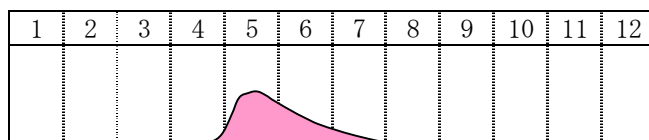
### 1. 発生樹種

ラズベリー、サルスベリ、バラ、ハマナス

### 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

4月下旬頃から本種成虫によると思われる被害が発生し、5月～6月に加害中の成虫をよく見かける。年1回の発生らしいが、成虫が長期間見られることから2～3回発生しているともいわれ、詳細は不明である。成虫は、体長2.5～3mm、全体黒色で背面は灰色の軟毛がある。

成虫は、新梢に傷を付けて産卵し、茎内で孵化した幼虫は枯死した茎や花蕾を摂食し、枯死部の落下とともに地上部に運ばれ、老熟すると土中に移行して蛹化するのである。



### 3. 被害の特徴

成虫は産卵目的だけでなく、通常の摂食でも新梢や花蕾、葉柄に被害を与えるため、新梢や花蕾は黒く乾固して枯れる。加害により枯れた新梢部は新たな萌芽により回復するので、木全体の枯損につながることは無いと思われる。

### 4. 対策

成虫は放置すると次々と新しい新梢を加害するので、新梢の萎凋に気づいたら成虫を探して捕殺又は薬剤散布により駆除する。

# アオドウガネ

甲虫目（鞘翅目）コガネムシ科



葉縁を不規則にかじるため食痕は汚い H23.8.23 イヌマキ(愛西市)



大発生し著しい被害を受けたイヌマキ H23.8.5 イヌマキ(愛西市)



カキの葉を不規則に食害する本種 H22.8.8 カキ(愛西市)



イヌマキを食害する本種 H23.7.30 イヌマキ(愛西市)

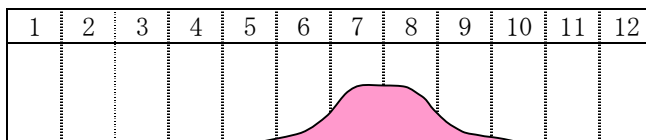
## 1. 発生樹種

イヌマキ、ウバメガシ、カキ、クリ、ブドウ、サクラ、ヤナギ、アメリカリョウブ、ハギ

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

体長は18～22mmで、青銅色のドウガネブイブイより、やや小型で濃緑色の個体をアオドウガネと呼ぶ。年1回の発生で、幼虫で越冬し、成虫は6月～9月の長期に渡って出現するが、食害は7月～8月の盛夏に目立つ。

夜行性で、夕方から盛んに活動し、昼間は葉かげなどに潜むため、朝・夕や曇天の日に目にするが多い。



## 3. 被害の特徴

イヌマキでは、葉を不規則に噛み切り、食害部位が褐変するので著しく美観が損ねられる。

イヌマキの仕立物に大発生してほとんど丸坊主になされたことがあるが、この時は木を叩いて衝撃を与えると10数匹が落下した。

カキなどでも、不規則な食痕をよく見かけるが、ほとんどは本種やマメコガネ、ミノガ類による食害である。

## 4. 対策

多発期には、葉かげに潜む成虫を見つけて捕殺したり、木をゆすって落下させて捕殺する。薬剤散布も有効であるが、外部から次々飛来する場合は効果は現れにくい。



# ヘリグロテントウノミハムシ

甲虫目（鞘翅目）ハムシ科



成虫が葉裏を不規則に食害 H23.4.22 ヒイラギモクセイ



葉裏の表皮内に潜入して葉肉を食う幼虫  
H23.5.19 ヒイラギモクセイ



幼虫(体長6mm)  
H23.5.19 ヒイラギモクセイ

右:羽化した成虫が出現し、  
主に葉裏を食害  
H23.6.16 ヒイラギモクセイ



成虫(体長3~4mm) H23.4.11 ギンモクセイ



成・幼虫に食害された被害葉が茶変し、著しく外観が悪化  
H23.5.24 ヒイラギモクセイ

## 1. 発生樹種

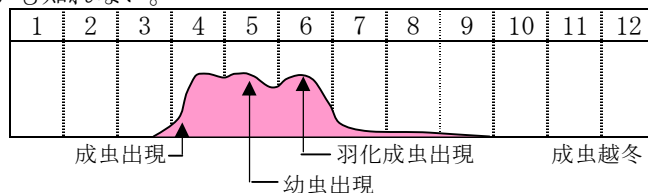
ヒイラギモクセイ、ギンモクセイ、ヒイラギ、ゴシキヒイラギ、フイリヒイラギ、イボタノキ

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

4月上旬に成虫が現れ、数の増加とともに新葉の不規則な食痕が目立つようになる。5月中旬になると、成虫は少なくなるが、葉に産み付けられた卵が孵化し、葉裏や葉裏の表皮の内側に黄白色の扁平な幼虫が点在するようになる。5月下旬になると成虫、幼虫とも減少するが、地上に降りて羽化した成虫が出現する6月中旬には再び成虫が急増し、その後徐々に減少する。7月以降は点在する成虫を見かける程度となるが、暑さを避けるため葉かげに潜んでいるのかも知れない。

成虫は体長3~4mm、テントウムシのような形態で、全体黒く、二つの大きな赤斑がある。

触れると一瞬で消えるようにジャンプして逃げる。幼虫は黄色で、葉の内側に潜り込んで葉肉を食い、6mm程度まで成長する。



## 3. 被害の特徴

成虫が4月中旬から新葉の葉裏を食害し、食痕が茶褐色に変色するので非常に見苦しくなる。

5月中旬には、孵化した幼虫が表皮の内側に潜って葉肉を食うので、さらに茶変がひどくなり、著しく景観が損ねられる。この幼虫が土中で羽化して地上に現れる6月中旬には、ふたたび成虫による食害が発生するが、6月下旬以降の食害は軽微となる。

## 4. 対策

年1回の発生で、落葉下などで成虫越冬するので、冬季に落葉を清掃し越冬虫を撲滅する。

葉に潜入した幼虫には薬剤散布の効果は期待できないので、成虫の多い時期、特に越冬成虫が出現・加害する4月中旬~5月上旬の散布が効果的である。

# ヤナギリハムシ

甲虫目（鞘翅目）ハムシ科



孵化後間もない幼虫(体長1.5～2mm)  
H23.8.4 シダレヤナギ



若齢幼虫(体長3mm)  
H22.8.11 シダレヤナギ



老齢幼虫(体長5mm) H22.8.13 シダレヤナギ



幼虫による食害  
H22.8.13 シダレヤナギ



蛹  
H23.6.13 シダレヤナギ



成虫による食害  
H23.8.25 シダレヤナギ



成虫 H22.4.5 シダレヤナギ

## 1. 発生樹種

ドロノキ、ポプラ、シダレヤナギ、ネコヤナギ、イヌコリヤナギなどヤナギ類

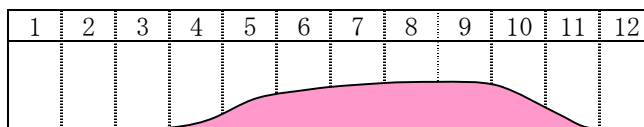
## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

年5～6回の発生で、落葉や枯れ草の下で集団で成虫越冬するとされる。

4月上旬、萌芽とともに成虫が出現し、葉を食害するのを見るようになる。以降、11月下旬まで成虫と幼虫が混在して葉を食害する。

卵は、新梢の先端葉の葉裏にかためて産卵する。

成虫は体長4mmで青藍色、幼虫は体長5～6mmで若齢時は黒く見えるが、老齢では黄白色で背面に黒色の列状突起がある。



## 3. 被害の特徴

ヤナギ類の重要害虫で、幼虫は葉肉のみを食害するため被害葉は枯死し、成虫は葉縁を不規則に食害する。多発すると樹は丸坊主になり、樹勢が衰えるとともに美観を損ねる。

## 4. 対策

成虫は、早朝か夕方、樹の下に白い布を広げて樹を急に揺ると落下するので、たやすく集めることができる。多発の場合、薬剤散布により防除する。



# アゲハ

チョウ目（鱗翅目）アゲハチョウ科



上: 若齢幼虫 H21.9.2 ミカン  
下: 中齢幼虫 H21.9.18 スダチ



老齢幼虫

H22.8.9 カラタチ



円内: 卵(H22.8.11 ハッサク)



成虫(産卵?)

H23.9.8 アサクラサンショウ



多発すると小木は丸坊主にされる

H22.9.15 アサクラサンショウ

## 1. 発生樹種

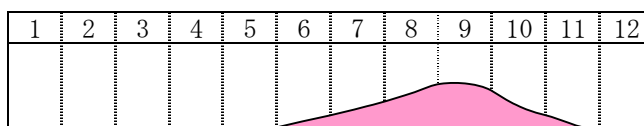
柑橘類、サンショウ、カラタチ

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

年3～4回の発生で蛹越冬する。幼虫は5月下旬に出現し、11月まで見られるが世代交代の時期ははっきりせず、若齢～老齢が混在する。卵は卵塊ではなく1粒ずつ産むので、幼虫が群生することはない。幼虫の発生は、暑さのピークが過ぎた8月下旬～9月中旬に最も多くなり、以後徐々に減少する。

若齢時は全体暗褐色で、白い斜紋があり、終齢になると全体鮮やかな緑色になり、蛇の目状の斑紋が表れる。体長は45mmに達する。

触れると、橙黄色の臭角を出し、柑橘類が腐ったような臭いを発する。



## 3. 被害の特徴

多発することは少なく、通常は部分的な被害で済むが、老齢幼虫の食害量はかなり多く、若木に集団発生すると葉が全て食い尽くされることがある。

## 4. 対策

幼虫は葉上にいてよく目立つので、見つけ次第捕殺するが、多発した場合は薬剤散布が必要となる。

# ヒロヘリアオイラガ

チョウ目（鱗翅目）イラガ科



孵化後間もない幼虫（体長3mm）  
H23.6.26 カキ（愛西市）



葉裏を食害する若齢幼虫（体長4～5mm）  
H22.6.21 モッコウバラ



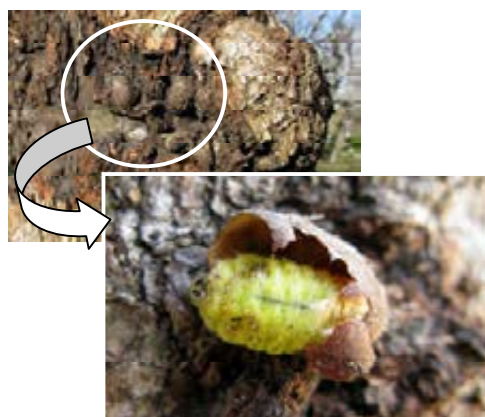
並んで移動する若齢幼虫（体長9mm）  
H23.8.22 アメリカザイフリボク



並んで葉縁を食害する中齢幼虫（体長12mm）  
H23.9.1 ホルトノキ



老齢幼虫（体長28mm）  
H23.9.26 サザンカ



上：越冬マユ（H21.12.8 カキ）  
下：前蛹態の本種（同上）

## 1. 発生樹種

カエデ、アメリカザイフリボク、シャシチャンボ、ブルーベリー、ウメ、サクラ類、アズキナシ、レッドロビン、ヤマモモ、カキ、シラカシ、ナンキンハゼ、モッコウバラ、イヌコリヤナギ、ミカン、ホルトノキ、アラカシ、タブノキ、ザクロ、クリ、サルスベリ、ハナズオウ、セイヨウバクチノキ、ソシンロウバイ、ヤマボウシ、リキュウバイ、ウバメガシ、サザンカなど多種

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

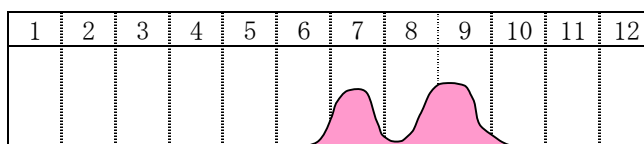
年2回の発生で、1回目は6月中旬から葉裏に群生して葉裏のみを食害する若齢幼虫を見るようになる。7～8mmに成長すると葉裏に並んで葉縁から食害するようになり（7月上旬）、15mm程度になると次第に分散し（7月中旬）、20mm超の老齢になるとほとんど単独となる（7月下旬）。

体長は、孵化後約10日で7mm程度、20日で16～18mm、30日で25mmを超える。

2回目は、幼虫が8月中旬から発生し、9月上・中旬に被害は顕著となるが、10月に入るとほとんどなくなる。

形態はアオイラガに似るが、若齢時から背面の模様で判別できる。

この地域で発生するイラガ類は大半が本種である。



## 3. 被害の特徴

幼虫は成長とともに数が減少し、食害量も多くはないので、部分的で軽微な被害で終息し、樹を衰弱させるような被害にはならないと思われる。むしろ毒刺毛に触れることによる人への被害の方が大きく、調査中にも何回か痛い思いをした。

## 4. 対策

枝幹に付く越冬マユを除去したり、葉裏に群生する若齢幼虫に触れないように注意して葉または枝ごと摘除する防除は、かなり有効と思われる。



# クロスジカギバ

チョウ目（鱗翅目）カギバガ科



孵化後間もない幼虫 H23.10.27 ゴモジュ



若齢幼虫 H22.4.9 ニワデマリ



卵塊 H21.10.21 サンゴジュ



成虫 H21.10.21 サンゴジュ



老齢幼虫の体色は  
変化が大きい  
右上: H21.9.14 サンゴジュ  
右中: H22.5.6 サンゴジュ  
右下: H23.5.9 サンゴジュ

左: 被害状況  
H21.9.29 サンゴジュ

## 1. 発生樹種

サンゴジュ、オオデマリ、ゴモジュ、ニワデマリ、ガマズミ

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

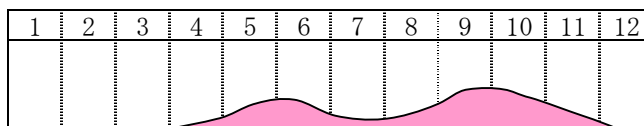
4月上旬に体長10mm弱の若齢幼虫が出現し、その後成長度合いが異なる幼虫が点在するようになり、5月上旬には30mmを超える老齢幼虫も現れる。

6月上旬～7月上旬には、新たに孵化したと思われる若齢幼虫が葉表に群生して葉の先端部分から葉表のみを食害する。卵は主に葉裏に卵塊として産み付けられ、孵化した幼虫は葉表に移動する。

平成21年には9月上旬～10月中旬に中齢～老齢幼虫が多発して大きな被害を受けたが、22、23年の10月中旬に出現した幼虫はほとんど成長することなく11月下旬には見られなくなった。

若齢幼虫は全体暗褐色であるが、中齢～老齢では暗褐色や淡緑色など体色の変化が大きい。

体長は、尾状突起を含めて40mmに達する。



## 3. 被害の特徴

年によって発生時期や規模が大きく異なるようである。若齢時は葉表に群生して表面のみを食害するが、やや成長すると分散・点状に葉縁を食害し、時にはサンゴジュの生垣を部分的に丸坊主にするほどの被害をもたらす。

## 4. 対策

若齢幼虫の食害により、葉の先端部分が枯葉色になり目立つので、分散する前に葉ごと摘除する。

# オビカレハ

チョウ目（鱗翅目）カレハガ科



卵塊 H22.11.24 ウメ



孵化幼虫(体長2mm) H23.3.24 ウメ



左:新芽に群れる若齢幼虫  
(体長3~4mm)  
H23.4.13 ウメ



右:中齢幼虫  
(体長27mm)  
H23.5.6 ウメ

右:被害状況  
幼虫の成長とともに虫数は減少し、軽微な被害で終息した



老齢幼虫(体長46mm)  
H23.5.16 ウメ



左:枝の分岐部に天幕状の巣を張って群生する H22.4.25 ヤナギ(愛西市)



上:幹を覆うように群生する中齢幼虫  
H22.5.4 サクラ(弥富市)

## 1. 発生樹種

サクラ類、ウメ、ヤナギ、モモ、リンゴ、バラ、ポプラ

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

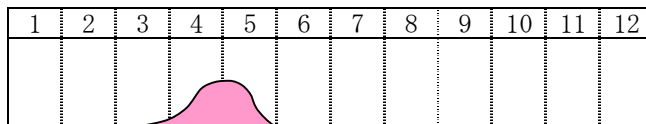
年1回発生し、小枝に帯状に産み付けられた卵で越冬する。

3月下旬に孵化し、灰白色の天幕状の巣を作り、中に群生して葉や新芽を食害する。

若齢時の成長は遅く、ウメに発生した本種の記録では、孵化後（2mm）、体長が10mmに達するのに1ヶ月以上を要した。その後の成長は早く、2週間後には25~28mmに成長した。

若齢・中齢幼虫は、日中はあまり活動せず群生しており、気配を感じると分散する。

老齢幼虫は60mmに達し、全体灰青色、背面に黒色で縁取られた橙色線がある。



## 3. 被害の特徴

幼虫は集合性が強く、天幕状の巣に群生して、主に夜間に巣から出て食害する。

老齢になると分散し、昼夜とも食害する。付近の樹にも移動して食害する。

## 4. 対策

小枝に帯状に産み付けられた卵塊はよく目立つので、見つけ次第除去する。

若齢・中齢幼虫は天幕状の巣に群生しているので、切り取って焼却する。竹棒の先端に油を浸ませた布を巻き、これに火をつけて直接巣を焼くのも効果的とされている。

幼虫が分散した後は、薬剤散布が必要となる。





卵塊

H23.6.24 ストローブマツ



若齢幼虫

H23.10.24 ゴヨウマツ



孵化後間もない幼虫による食害

H23.7.14 ゴヨウマツ



蛹

H23.5.2 クロマツ



中齢～老齢幼虫

H23.5.9 ストローブマツ



老齢幼虫

H22.3.17 ストローブマツ

## 1. 発生樹種

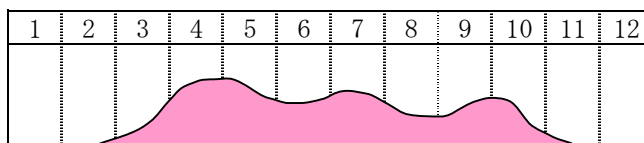
クロマツ、アカマツ、シダレアカマツ、ストローブマツ、ゴヨウマツ、タギョウショウ

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

通常年1回の発生とされているが、6月下旬～7月中旬と9月中旬～10月上旬の2回、孵化幼虫が出現する。第1回は、越冬幼虫が4月下旬～5月下旬に繭を作って蛹化し、5月下旬～6月中旬に羽化して、産卵するもので、第2回は8月中旬～9月上旬に羽化した成虫が産卵するものと思われる。

また、5月中旬～6月上旬と8月上旬～下旬は老齢幼虫が多くなり、孵化幼虫の出現期には若齢幼虫が多くなるが、幼虫が見られる全期間で若齢～老齢までの幼虫が混在していることが多く、その生活環はかなり複雑であることが推測される。

若齢幼虫は茶褐色で、成長すると銀白色になり、胸部背面の紫藍色の毛束が目立つ。この毛に触れて刺さると激痛があり、腫れ上がるといわれる。老齢幼虫の体長は90mmに達する。



## 3. 被害の特徴

孵化後間もない幼虫は、卵塊付近で葉を不規則に食うため、食害された葉が枯れて目に付き、本種の発生に気付くことが多い。孵化後、ほどなく分散して葉を先端から全部食うようになり、部分的に小枝が丸坊主になる。大発生の場合は樹が丸坊主になり、樹勢が大きく衰弱して枯死につながることもある（文献）が、センターでは小規模な発生に留まり、顕著な被害には至らなかった。

## 4. 対策

秋に主幹にこもを巻いて幼虫を越冬させ、2月頃にはずしてこもと焼却する「こも巻き」は、冬の風物詩となっているが、有効とされる一方で、捕れるのは大半が益虫であり逆効果との指摘もある。

また、卵塊の摘除は直接的な大きな効果がある。薬剤散布は越冬幼虫による被害が顕著となる3月下旬～4月下旬と若齢幼虫期の散布が望ましいとされるが、発生が一様でないので適期が把握しにくい。

## ウスバフユシャク

チョウ目（鱗翅目）シャクガ科



若齢幼虫(体長8mm)  
H23.4.13 ハナカイドウ



中齢幼虫(体長10mm)  
H23.4.13 マルメロ



老齢幼虫(体長16mm)  
H23.4.21 ハナカイドウ



老齢幼虫(体長20mm)  
H23.4.27 ハナカイドウ



本種による食害状況  
H23.4.24 カワズザクラ(桑名市)

### 1. 発生樹種

サクラ類、モモ、ウメ、カエデ類、レッドロビン、マルメロ、ハナカイドウ、ボケ、ハマナス

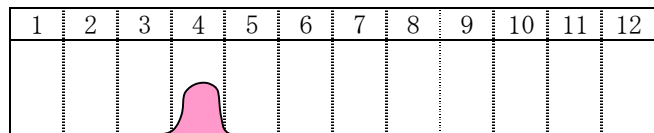
### 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

年1回の発生で、幼虫は4月上旬に出現する。

群生することはない、主に落葉樹の芽吹いて間もない新葉に単独で出現し、4月下旬から5月上旬には老熟して土中に入り、土粒を綴って繭を作る。

老齢幼虫の体長は20mmで、体形は細長く、体表に著しい突起はない。

頭部は淡緑色、胴部は淡緑色ないし黄緑色で、背に少し濃い緑色の線があり、白い側線が顕著である。



### 3. 被害の特徴

新葉の展開に合わせるように出現し、単独で葉を食害して不規則な食痕を残す。

出現期間は短く、食害量も多くはないが、新葉が不規則に傷つけられるため見栄えは悪くなる。

同時期に発生する害虫にマエアカスカシノメイガの幼虫がいるが、これは主にモクセイ科の木に発生し、新葉を数枚綴って、食害する。

### 4. 対策

発見次第、捕殺する程度でよいと思われる。



# ユウマダラエダシャク

チョウ目（鱗翅目）シャクガ科



成虫

H23.5.24 キンマサキ



老齢幼虫

H22.7.2 キンマサキ



被害状況(近景)

H22.6.30 キンマサキ

(葉柄まできれいに食べ尽くし丸坊主になってしまう)



老齢幼虫(体長38mm)  
(越冬幼虫と思われる)

H23.4.13 キンマサキ



上: 被害状況

H22.7.16 キンマサキ

右: 回復状況

H22.8.9 キンマサキ



## 1. 発生樹種

マサキ、マユミ、キンマサキ、ツルマサキ、コマユミ

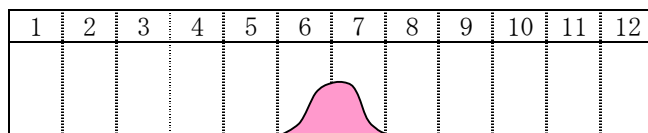
## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

年2～3回の発生で、幼虫で越冬するとされる。

5月下旬に成虫が多数出現し、交尾中のものもよく見かけるので、この頃に産卵すると思われる。

幼虫は、6月上旬から出現し、多発すると6月下旬に大きな被害をもたらす、7月下旬にはほぼ終息する。これらが老熟して成虫（成長の早いものは次世代）となり、年内に産卵して孵化幼虫で越冬するとされるが、調査においては、7月の被害終息後、本種の発生を確認していない。

老齢幼虫は体長25～30mm、全体黒色で橙黄色の不規則な縦線がある。



## 3. 被害の特徴

5月下旬に産卵された卵は、6月上旬に一斉に孵化し、幼虫が葉を食害する。

多発すると、猛烈な勢いで葉柄まで食べ尽し、新梢の茎だけが残る無残な姿となる。

マサキは萌芽力が強く、7月下旬に食害が終息する頃には、既に回復の兆しが見え、8月上～中旬には、ほぼ回復する。

## 4. 対策

被害の発生に気づいた時点で、すでに樹全体に幼虫が分散していることも考えられるので、薬剤散布により防除する。

当センターのマサキの生垣は、平成22年には激甚な被害を受けたが、23年は被害が拡大する前の7月上旬に刈込み剪定を行い、被害拡大を未然に防止することが出来た。

被害がピークとなる6月下旬～7月上旬は、剪定の適期でもあり、有効な防除方法の一つと考えられる。

# オオトビモンシャチホコ

チョウ目（鱗翅目）シャチホコガ科



若齢幼虫(体長6mm) H23.4.19 アラカシ



上・右: 主脈を残して葉を食べ尽し、移動する  
(体長15~17mm) H23.5.2 アラカシ



葉を食べ尽し葉柄に群れる中・老齢幼虫(体長30mm) H23.5.9 オウゴンガシワ



老齢幼虫(体長45mm) H23.5.13 コナラ

## 1. 発生樹種

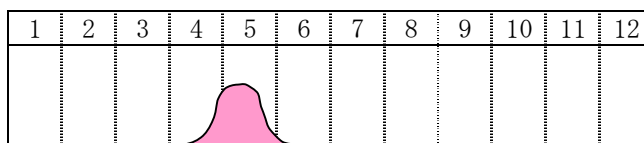
コナラ、ミズナラ、クリ、クヌギ、カシワ、アラカシ、アベマキ

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

年1回の発生で、越冬卵は4月中旬から孵化し、葉裏に群生して葉を食害する。

若齢幼虫時から主脈を残して葉を食べ尽し、成長とともにいくつかの少群に分散して葉を暴食し、被害は拡大する。4月中旬にアラカシに発生した体長6mmの幼虫は、20日間で27mm程度に、30日後には45mmまで成長した。老齢幼虫は、55mmに達するものもある。6月上旬には土中に潜って蛹化する。

孵化後間もない幼虫は、淡黄褐色で、次第に橙褐色になり、中齢になると毒々しい不規則な縞模様が生じる。老齢になると模様はそのままでは体色は淡褐色になる。



## 3. 被害の特徴

幼虫の出現期間は4月下旬～5月下旬までで、短期間ではあるが、食害量は多く、大発生すると大きな被害になる。

## 4. 対策

幼虫は群生して加害する習性があるので、群生している枝葉を早期に見つけ、切除すると効果的である。冬季に卵塊を見つけ捕殺するとよいとの記載（文献）もあるが、調査では見つからなかった。多発時には薬剤散布により防除する。



# モンクロシャチホコ

チョウ目（鱗翅目）シャチホコガ科



孵化後間もない幼虫（体長4mm）

H22.8.11 ウメ



中齢幼虫（体長20mm）

H22.8.18 ウメ



老齢幼虫（体長47mm）

H22.8.23 ウメ



老齢幼虫（体長40mm）

H23.8.18 ウメ



本種による被害

H23.8.18 カワズザクラ

## 1. 発生樹種

ウメ、サクラ類、アメリカザイフリボク、ナシ、リンゴ、モモ、アンズ、マルメロ

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

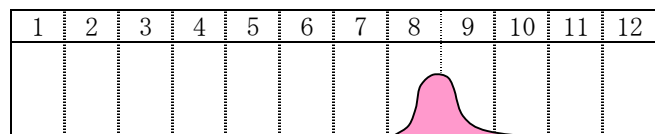
年1回の発生で、8月上旬から葉裏に群生する若齢幼虫を見かけるようになる。

成長は極めて早く、孵化後間もない体長4mm程度の若齢幼虫は、1週間で20mm、10日間で約30mmになり、この頃になるとかなり分散して葉を暴食するようになる。調査記録では、2週間後に50mmを超えた。

9月中旬以降、幼虫の数は急激に減少するが、少数が残存し、11月に見かけたこともある。

体色は、若齢幼虫では茶褐色で、成長するにつれて紅褐色になり、更に成長すると紫黒色になり、黄白色の長毛が目立つようになる。

幼虫は警戒すると頭部と尾端を反らす習性がある。



## 3. 被害の特徴

枝先に発生した幼虫は葉を食べ尽くしながら集団で移動するが、分散して食害量が多くなる8月中旬から被害が顕著になり、8月下旬～9月上旬にピークとなる。9月中旬にはほぼ終息する。

ウメに発生した多くの事例では、部分的な被害で終息することが多かったが、サクラ類では大発生し、樹全体が丸坊主にされたこともある。本種は同じ場所で発生する傾向が強いようである。

## 4. 対策

低木では群生している若齢幼虫を見つけやすいが、サクラなどの高木では、被害が拡大してから発生に気付くことが多い。とにかく成長が早く食害量も多いので、早期に発見して幼虫が分散する前に防除することが必要である。

# オオスカシバ

チョウ目（鱗翅目）スズメガ科



産卵して飛び去る成虫 H23.7.28 クチナシ



卵殻を食べる孵化幼虫(体長3mm) H23.9.15 クチナシ



若齢幼虫(体長13mm) H22.7.16 オオヤエクチナシ

褐色型(体長20mm) H22.9.24 クチナシ



中齢幼虫(体長28mm) H23.8.1 クチナシ



老齢幼虫(体長54mm) H23.9.15 クチナシ



本種幼虫を捕食するアシナガバチ H23.8.1 オオヤエクチナシ



右:被害状況 H22.10.18 オオヤエクチナシ



体色は変異が多い H22.10.8 オオヤエクチナシ

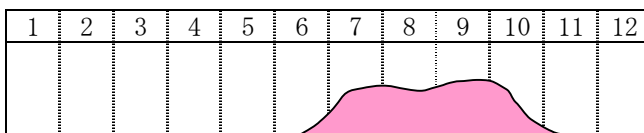
## 1. 発生樹種

クチナシ、オオヤエクチナシ、コクチナシ

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

年2回の発生、土中で蛹で越冬する。第1回の幼虫は6月中旬に出現し、その後10月下旬まで若齢～老齢の幼虫が混在していることが多く、産卵や羽化など、生活環の区切りの時期は不明瞭である。8月上旬～中旬に成虫が木の周りを飛翔し、産卵する姿をよく見かける。卵は直径1mm位で緑色、1粒ずつ新梢に産み付ける。幼虫は、緑色型と褐色型があるが、ほとんどは緑色型で葉と同色のため見つけにくい。又、猛暑時は暑さを避けて葉裏等にいるらしく、糞や食痕で幼虫の存在を知ることが多い。

緑色型の幼虫は、頭部緑色で、下方は褐色、胴部は黄緑色で各節に1個ずつ藍黒色の斑点がある。体長は65mm（老齢）で、スズメガ特有の尾角を備える。



## 3. 被害の特徴

幼虫は若齢時から新葉の縁を食害し、成長とともに食害量は多くなり、大発生すると葉は食べ尽くされて丸坊主にされる。

## 4. 対策

葉や地上に落ちた糞で幼虫の存在に気づくので、見つけ次第捕殺する。広範囲で大量発生した場合は、薬剤散布が必要となる。アシナガバチが本種幼虫を捕らえ、頭部を食いちぎって、葉の上に残し、胴部を巣に持ち去る姿をよく見かけた。天敵として被害軽減に役立っているかも知れない。



# ツゲノメイガ

チョウ目（鱗翅目）ツトガ科



若齢幼虫による食害 H23.7.26 セイヨウツゲ  
(体長5mm)



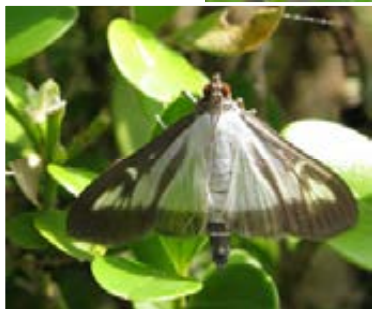
中・老齢幼虫による食害 H22.7.28 セイヨウツゲ



老齢幼虫 H23.4.22 セイヨウツゲ



上: 蛹 H23.9.6 セイヨウツゲ  
左: 成虫 H22.8.20 セイヨウツゲ



上: 生垣の被害状況  
H22.8.9 セイヨウツゲ  
右: 被害の近景  
H22.8.9 セイヨウツゲ

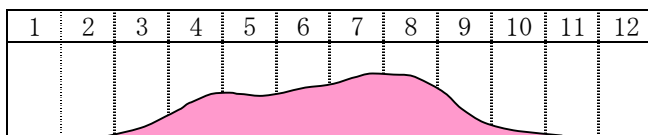
## 1. 発生樹種

ツゲ、イヌツゲ、セイヨウツゲ

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

3月上旬から若齢幼虫が出現し、中・下旬には30mmを越える老齢幼虫も混在するようになる。  
年3～4回の発生とされるが、幼虫が出現する全期間で若齢から老齢までの幼虫が混在するため、正確な発生回数は把握できない。

老齢幼虫は、体長35mmに達し、頭部は光沢のある黒色、胴部は全体黄緑色で暗褐色の縦線や黒点が連続する。



## 3. 被害の特徴

若齢幼虫は、新葉を重ねるように綴って、葉の表皮と葉肉を食害するため、葉は白くかすれ状になり、よく目立つ。少し成長すると新梢や新葉に糸を張って巣を作り、体を乗り出して葉を食害するが、気配を感じるとすばやく隠れる。摂食量は多く、多発すると葉は食べ尽くされて丸坊主になる。

センターでも毎年大きな被害を受けるが、ツゲ類は萌芽力が強いので、枯れたことはない。

## 4. 対策

若齢～老齢の幼虫が混在していることが多く、発生時期の特定が難しいので、若齢幼虫の食害による白くかすれた葉が目立つようになったら、直ちに薬剤散布をする。

ツゲ類は枝が密生しており、薬液がかかりにくいので、内部まで念入りに散布することが大切である。

# マエアカスカシノメイガ

チョウ目（鱗翅目）ツトガ科



若齢幼虫(体長7mm) H23.10.11 ヒトツバタゴ



老齢幼虫(体長19mm) H23.10.14 ギンモクセイ



被害状況 H22.10.20 オウゴンオオバイボタノキ



被害状況

H22.10.20 イボタノキ



老齢幼虫(体長24mm)

H22.10.4 イボタノキ

## 1. 発生樹種

ヒイラギ、ネズミモチ、イボタノキ、ギンモクセイ、トウネズミモチ、キンモクセイ、ライラック、ヒイラギモクセイ、シルバープリペット、セイヨウイボタ、オリーブ、ヒトツバタゴ

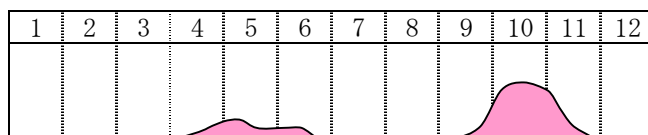
## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

年2～3回発生し、蛹で越冬する。4月下旬から幼虫が出現し、2～3枚の葉を綴ったり、葉表に幕を張って中に棲み、主に内側の表皮と葉肉のみを食べる。外側の表皮を残すので被害葉は白く見える。

4～5月の被害が大きい（文献）とされるが、春は軽微な被害で終息し、幼虫は6月中旬に消失する。夏期の発生は無く、9月下旬に再び幼虫が出現する。

老齢幼虫は、体長20mmを超える。体色は胴部全体が透明感のある淡緑色、背に濃緑色の線があり、頭部は淡黄緑色である。胴部に多数の黒点のある個体も見かける。

胴部は中央で太く、両端に向かってやや細くなる。



## 3. 被害の特徴

2年間の調査では、春の被害は軽微であったが、秋にはモクセイ科のほとんどの樹木に多発した。

幼虫は、表皮を残して葉肉を食べたり、葉縁を不規則に食べるため、残った表皮は白変、茶変してよく目立ち、著しく美観を損ねる。食害箇所には幼虫の糞も多く付着する。

## 4. 対策

幼虫は集合性はなく、ほとんど単独で巣に棲むので、多発した場合は薬剤散布による防除が必要である。秋の発生は10月にピークとなるので、被害後の剪定により、美観を回復させることは可能である。



# チャドクガ

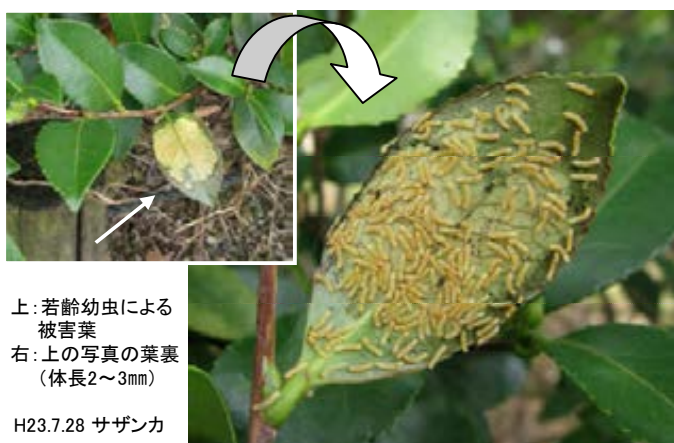
チョウ目（鱗翅目）ドクガ科



孵化後間もない幼虫（体長2mm）  
H23.4.27 ヤブツバキ

葉の両面に整列し、葉縁を食害（体長10mm）  
H23.5.26 ヤブツバキ

老齢になると次第に分散する（体長18～20mm）  
H23.6.13 ヤブツバキ



上：若齢幼虫による被害葉  
右：上の写真の葉裏（体長2～3mm）

H23.7.28 サザンカ



老齢幼虫（体長22mm）

H23.9.12 サザンカ

## 1. 発生樹種

ツバキ、サザンカ、ナツツバキ、チャ

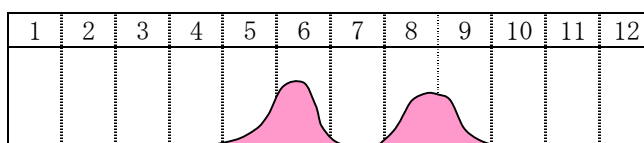
## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

年2回の発生で、卵で越冬する。第1回幼虫は4月下旬に現れ、6月中旬まで加害して下旬に終息する。第2回幼虫は7月下旬から現れ、9月中旬まで加害する。

体色は、孵化後間もない若齢幼虫では全身黄白色で、ほどなく背に黒斑が表れる。成長とともに体色は黄褐色となり、中・老齢になると背の両側に黒斑が連続し、その外側に白線が縦走する。

非常に集合性が強く、葉の両面に整然と並んで食害する。老齢幼虫は体長25mmに達する。

成・幼虫ともに毒刺毛をもち、触れると激しいかゆみや炎症を起こす。かけばかくほど毒刺毛は食い込むため、洗い流すか粘着テープで取り除くとよいらしい。



## 3. 被害の特徴

孵化後間もない若齢幼虫は、葉裏に群生して葉裏のみを食害するが、成長とともに葉脈を残して網目状に食害するようになり、6～7mmになると葉の両面に整列して葉縁から食害するようになる。

大発生すると食害量は甚大で、センターでもカンツバキの植込みが丸坊主にされた。

## 4. 対策

発生初期の幼虫は、葉裏に群生して葉裏のみを食害するので、黄変した葉を見つけたら葉裏を確認し、幼虫に触れないように摘除する。若齢・中齢でも集合性が強く、葉に整列しているので、葉を摘除すれば、被害の拡大を防ぐことができる。

ネムスガ（ネムノキスガ）

チョウ目（鱗翅目）ネムスガ科



若齡幼虫(体長7mm)H23.7.26 サイカチ



中齡幼虫(体長10mm)

H22.9.6 ネムノキ



左:老齡幼虫(体長13mm)  
H23.10.11 サイカチ



被害状況 H23.10.11 サイカチ



老齡幼虫(体長14mm)

H23.7.26 サイカチ

田内:被害近景 H23.10.14 サイカチ

## 1. 発生樹種

ネムノキ、サイカチ

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

年2回の発生（近畿地方）で、蛹で越冬し、第1回の成虫が6月上旬ごろから産卵するとされる。

幼虫は6月中旬から出現し、葉を包み込むように巣を作って中で食害する。

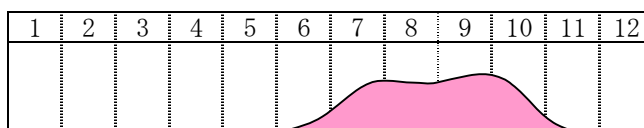
糸で垂れる習性があり、木の下を通ると知らぬ間に衣服に付着していることがある。

巢には幼虫が単独で棲むが、まれに若齢幼虫が混在していることがある。

老齡幼虫の体長は14mmに達する。

体色は、若齢時は淡褐色で、老齢になると暗褐色になり胴部の背面や側面に白い縦線が目立つ。

文献ではネムノキの害虫として扱われているが、同じマメ科のサイカチにも発生する。



### 3. 被害の特徴

巢に取り込まれた葉は片面のみを食害されるので、被害箇所は淡褐色になってよく目立つ。

個々の巣には幼虫が単独で棲むことが多いが、大発生すると被害は樹全体に及び、ひどく景観を損ねる。

## 4. 对策

発生すると大きな被害になることが多く、初期の薬剤散布が必要と思われる。



# アメリカシロヒトリ

チョウ目（鱗翅目） ヒトリガ科



## 1. 発生樹種

カエデ類、サクラ類、ウメ、ラクウショウ、ヒトツバタゴ、カキ、マメナシ、ガマズミヌダム、ウメ  
モドキ、モモ、シナサワグルミ、ソシンロウバイ、ハナミズキ、アキニレ、ヤナギ、ポプラなど多種

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

普通は年2回の発生で蛹越冬するとされているが、当地域では年3回発生していると思われる。

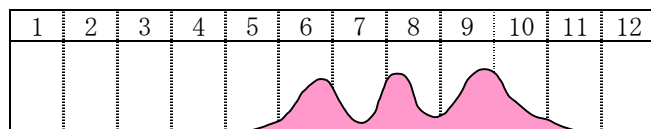
第1回は6月上旬～下旬に幼虫が現れ、第2回は7月中旬に産卵して7月下旬～8月上旬に幼虫が現れる。第3回は8月下旬～9月上旬に交尾・産卵を多く見かけ、幼虫は9月上旬から10月中・下旬まで見られる。産卵は主に葉裏に数百個産み付け、成虫は産卵後もそこに留まることが多い。

孵化した幼虫は、葉を包むようにくもの巣状の巣を作って群生し、表皮と葉脈を残して葉肉のみを食うので、被害葉は白くかすれ状になり、成長とともに付近の葉を取り込んで被害は拡大する。

さらに成長すると次第に分散して単独で葉脈まで食うようになり、別の樹に移って食害することもある。カキに発生した幼虫（2～3mm）は、1週間で約10mm、2週間で約20mmに成長した。

老齡幼虫の体長は約30mmに達し、蛹になる場所を求めて樹を降りて移動するようになる。

孵化後間もない幼虫は、淡灰色で頭部は黒く、やがて体色はやや黄色味を帯び、背の両側に黒斑(肉瘤)が連続する。老齢になると背面は灰黒色、側面は淡黄色となり、背や側面の肉瘤に白い長毛が密生する。体色は変異があり、全体が白っぽい個体も多く見られる。



### 3. 被害の特徴

本種は極めて多種の樹に発生するが、センター内ではカエデ類やウメ、サクラ類などでの被害が多い。

年3回のどこかの発生による部分的な被害で終息することが多いが、ネグンドカエデやラクウショウでは、継続的に数箇所が発生したため、被害は樹全体に及んだ。

## 4. 对策

若齢幼虫が群生している巢の摘除が最も効果が大きいが、分散が始まってしまうと薬剤散布が必要となる。高木で摘除が困難な場合も幼虫発生初期に1～2回薬剤散布する必要がある。

# ミノウスバ

チョウ目（鱗翅目）マダラガ科



若齢幼虫(体長5mm)

H23.4.11 マサキ



若齢幼虫による被害

H23.4.13 マサキ



中齢幼虫(体長8～10mm)による食害  
H23.4.19 マサキ



中齢幼虫

H22.3.29 キンマサキ



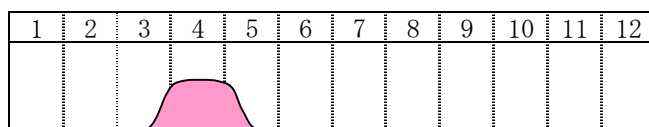
老齢幼虫(体長22mm) H23.5.6 キンマサキ

## 1. 発生樹種

マサキ、ニシキギ、マユミ、ヒサカキ、バイカウツギ

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

年1回の発生で、卵越冬するとされる。幼虫は3月下旬に出現し、新梢部の葉裏等に群生する。  
平成22年は、発生に気付いた3月下旬にはかなり食害が進行しており、4月下旬に終息したが、冬の寒さが長引いた23年は、4月中旬に幼虫が出現し、5月中旬に終息した。  
その年の気候により、発生時期はかなり前後するようである。  
老齢幼虫は、体長20mmを超え、全体黄白色で、数本の黒褐色の縦線がある。



## 3. 被害の特徴

若齢幼虫は葉の片面を残して葉肉を食うため、被害葉は縮れて枯れるが、成長すると葉の縁から全部食うようになり、多発すると葉は食べ尽くされる。

## 4. 対策

被害樹を揺すって、落ちた幼虫を集めて処分する防除法もあるが、生垣等では、集めることが難しく、多発の場合、薬剤散布により防除する。





オオミノガ H23.8.16 クリ  
円内:オオミノガの幼虫(H23.8.15 クリ)



チャミノガ H23.10.20 ミヤギノハギ



コミノ H23.8.18 ヒサカキ(愛西市)



コミノによる被害状況  
H23.8.25 ナツツバキ



コミノによる食害 H23.9.26 イタリアサイプレス



コミノによる食害 H22.8.20 クマシデ

## 1. 発生樹種

オオミノガ：カキ、ウメ、柑橘類、クリ、クヌギ、サクラ、カナメモチ、ヤナギ

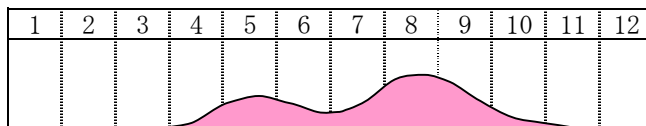
チャミノガ：サクラ、ツツジ、サツキ、カエデ、柑橘類、モッコク、サンゴジュ、アカメガシワ、フジ

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

年1回の発生で、ミノを枝に固着させ、その中で幼虫越冬する。翌春再び摂食して蛹化し、5月下旬～7月中旬に成虫が現れ、交尾・産卵する。両種ともきわめて雑食性が強く、多くの樹種に寄生する。

オオミノガは、少し大型で、木の葉を集めて4～5cmの紡錘形のミノを作り、チャミノガは小枝を縦に多数付けて3～4cmの円筒形のミノを作る。

若齢虫はコミノと呼ばれ、集団で葉や果実などをかじって相当な被害を与えることもある。



## 3. 被害の特徴

オオミノガは、8月中旬にクリに相当数発生し、部分的ではあるが葉がかなり食害された。コミノによる被害は、8月上旬から顕著になり、クマシデやナツツバキ、ヒサカキ、イタリアサイプレスで著しい被害となった。

## 4. 対策

剪定時などにできるだけ捕殺する。薬剤散布による防除は、コミノ発生期に行う。



若齢幼虫の巢 H23.9.29 ヤマコウバシ



若齢幼虫(体長5～7mm) H23.10.4 ヤマコウバシ



中齢幼虫(体長13mm) H23.7.21 ヤマコウバシ



枝先の葉を綴った巢

H22.8.9 ヤマコウバシ



左: 老齢幼虫(体長23mm)  
H22.8.23 ウバメガシ



老齢幼虫(体長27mm)

H23.8.13 ヤマコウバシ

## 1. 発生樹種

クスノキ、タブノキ、アブラチャン、ウバメガシ、ヤマコウバシ、クロモジ、ダンコウバイ

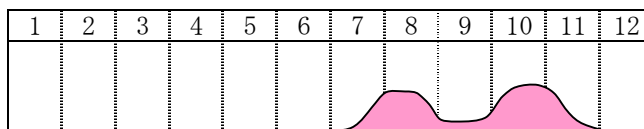
## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

年2回の発生で、1回目は7月上旬から幼虫が出現する。卵は少数の卵塊として産み付けられると思われる、若齢幼虫は、葉を重ねた隙間に10数匹が群生する。

成長とともに虫数は減少し、単独～数匹になるが、巢は周りの葉を取り込んで大きくなる。虫糞が充満する巢内に、さらに糸で筒状の細長い巣を作って幼虫が棲む。8月下旬～9月上旬にはほぼ終息するが、第2世代の幼虫が9月下旬から出現する。10月初旬に発生した若齢幼虫（体長5～7mm）は、10月下旬に20mm前後まで成長したが、この頃には、樹全体に巢が点在し、見苦しくなった。

11月下旬にも巢内に生存する幼虫を確認しており、幼虫の発生時樹にはかなりの幅があると思われる。

老齢幼虫は体長30mmに達し、全体褐色で背の両側や側面に暗褐色の縦線が走る。



## 3. 被害の特徴

巢は、食害された葉が糸で固められ、ゴミの塊のように見えるため、多発して樹全体の枝先に点在すると非常に見苦しくなる。発生のほとんどはクスノキ科の樹種である。

## 4. 対策

枯葉を固めた巢は、非常に目に付きやすく、老齢になっても幼虫は巢内にいるので、見つけ次第、枝ごと摘除するのが確実な方法であるが、高所にも発生するので容易ではない。

幼虫はかなり堅固に固められた巢の中にいるので、薬剤散布の効果はあまり期待できないと思われる。



# トサカフトメイガ

チョウ目（鱗翅目）メイガ科



葉を包み込むような大きな巣を作り、中に幼虫が群生  
H23.8.2 シナサワグルミ



巣をほぐすと内部に幼虫が群生  
H23.7.21 スモークツリー



葉を食べ尽くされてクモの巣状の巣が残る  
H23.7.28 スモークツリー



若齢幼虫（体長6～7mm） H23.8.1 ハゼノキ



中齢幼虫（体長20mm） H22.7.30 シナサワグルミ



老齢になると単独で巣を作る（体長33mm）  
H22.7.30 シナサワグルミ

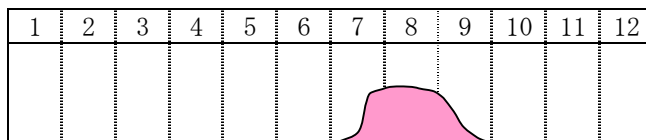
## 1. 発生樹種

ヌルデ、クルミ、ニワウルシ、シナサワグルミ、スモークツリー、ハゼノキ

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

年1回の発生とされるが、長期間にわたって、若齢幼虫の出現を記録しており、2回発生している可能性もある。初めは7月中旬に発生し、枝先の葉を包み込むような大きな巣を作り、中に若齢幼虫が群れる。取り込んだ葉を食べ尽くすと集団で移動し、被害を拡大させる。20～30mm程度に成長すると分散して単独で営巣するようになる。8月下旬にも新たな若齢幼虫が出現し、同様の成長経過をたどる。

老齢幼虫は体長40mmに達し、頭部は黒色、背面は茶褐色で、側面に暗褐色帯が縦に走り、この中に白斑が散在する。



## 3. 被害の特徴

枝先の葉を綴った巣の中で集団で食害するため、被害の進行は早い。中・老齢になると分散して、単独で新たな巣を作るので被害はさらに拡大する。

葉脈を残して食べ尽くすため、葉脈を包むようなクモの巣状の残骸が残り、著しく美観を損ねる。

## 4. 対策

発生初期は、枝先に葉を取り込んだ大きな巣を作って群生するので、見つけやすい。枝ごと切除して焼却するのがもっとも確実な防除法である。

# クスサン

チョウ目（鱗翅目）ヤママユガ科



若齢幼虫(体長6～10mm)

H23.4.28 サワグルミ



若齢幼虫(体長11mm)

H23.5.2 サワグルミ



若齢幼虫(体長8～14mm)

H23.5.6 サワグルミ



中齢幼虫(体長25mm)

H23.5.13 サワグルミ



スカシダワラとよばれる繭  
H22.6.11 クリ



老齢幼虫(体長55mm) H23.5.26 サワグルミ

## 1. 発生樹種

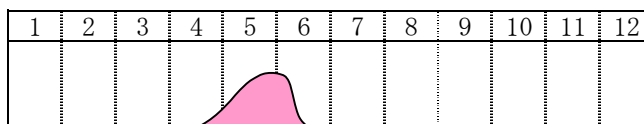
クリ、コナラ、クヌギ、サワグルミ、サクラ、ウメ、カツラ

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

年1回の発生で、樹上で越冬した卵が4月頃孵化し、下旬には若齢幼虫の群生が見られるようになる。若齢時、全体黒色で黒い短毛が疎生する虫体は、成長とともに大きく変化する。白い長毛が生え、黒い胴体には大きな白斑が現れて、次第に体全体が淡緑黄色になり、背面は白くなる。また、全体が白色の長毛に覆われるようになる。

同じ卵塊から孵化したと思われる幼虫でも、若齢時から体長にはばらつきが見られる。

老齢になると100mmを超える幼虫もみられ、6月中旬頃から繭をつくり、蛹になる。



## 3. 被害の特徴

若齢時は群生して葉を食害するが、群れは比較的少数で食害量も多くはないが、成長とともに分散して食害量も増大する。しばしばクリやクヌギに多発して葉をほとんど食い尽くし、丸坊主にすることもある。

## 4. 対策

越冬卵は見つけ次第除去するとともに、若齢幼虫が群生している枝を切除するのが有効であるが、多発、分散した場合は、薬剤散布による防除が必要となる。



# コブシハバチ

ハチ目（膜翅目）ハバチ科



葉裏の表皮内に産み付けられた卵が孵化  
H23.5.15 シデコブシ(愛西市)



孵化幼虫(体長3mm)  
H23.5.15 シデコブシ(愛西市)



若齢幼虫(体長5mm) H23.5.16 コブシ



中齢幼虫(体長7~8mm) H23.5.19 コブシ



老齢幼虫(体長20mm) H23.5.26 コブシ



幼虫を捕食するハナグモ  
H22.5.8 シデコブシ(愛西市)



分散して葉を食害する老齢幼虫  
H23.6.4 シデコブシ(愛西市)



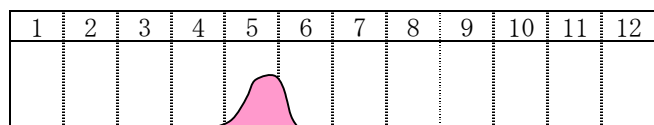
被害状況 H23.6.3 シデコブシ

## 1. 発生樹種

コブシ、シデコブシ、モクレン

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

年1回の発生で、葉裏の表皮内に点々と産み付けられた卵が5月上～中旬に孵化する。成長は早く、孵化後間もない幼虫（体長5mm）は、10日後に20mmに達し、さらに1週間後には終齢幼虫の体長30mm近くまで成長する。幼虫期間は短く、6月上旬には終息する。老齢幼虫の体色は、背面は緑灰色、腹面は黄緑色で頭部は黒い。



## 3. 被害の特徴

幼虫は若齢時から葉縁を食害し、成長とともに分散して食害量も増大、多発すると樹を丸坊主にする。

## 4. 対策

群生している若齢時に葉ごと摘除するのが確実であるが、分散したら薬剤散布が必要となる。

# サクラヒラタハバチ

ハチ目（膜翅目）ヒラタハバチ科



発生初期の巣 H23.5.16 オオシマザクラ  
(幼虫の体長4mm)



若齢幼虫(体長4mm)  
H22.5.13 オオシマザクラ



若齢幼虫(体長8mm)による食害状況  
H22.5.21 オオシマザクラ



中齢幼虫(体長18mm)  
H23.5.30 セイヨウミザクラ



老齢幼虫(体長25~28mm)  
H23.6.6 セイヨウミザクラ

右:被害状況  
H22.6.6 セイヨウミザクラ

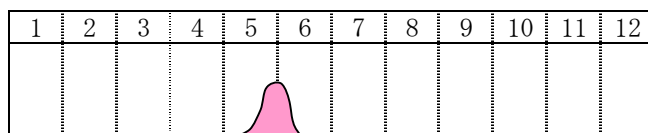


## 1. 発生樹種

サクラ類、ナナカマド

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

年1回の発生で、5月中旬に幼虫が出現し、発生初期の若齢幼虫は、葉表に巣を張って中に群生する。幼虫は集合性が強く、老齢になるまで、常に巣に群生し、食害後は葉脈と大量の虫糞が巣内に残る。6月上旬に被害は終息し、老齢幼虫は地中に潜って越冬する。老齢幼虫は体長30mm、胴部は淡赤褐色～暗黄緑色で、頭部は黒色で角状の突起がある。



## 3. 被害の特徴

幼虫は、巣に取り込んだ葉を食べ尽くすと、移動して巣を拡大させて食害する。

幼虫の出現期間は短く、加害期間も短いので、一群の幼虫による食害量は多くはないが、多発すると、樹全体に巣の残骸が点在し、外観は悪化する。

## 4. 対策

発生初期から巣網は目立つので、見つけ次第、巣ごと除去して処分するのが確実である。



# マツノミドリハバチ

ハチ目（膜翅目）マツハバチ科



食害状況 H23.9.6 ゴヨウマツ



食害状況 H23.9.12 ゴヨウマツ

孵化幼虫の出現 H23.9.20 ゴヨウマツ  
(針葉の組織内に産卵するとされる)



円内:被害状況(一枝が丸坊主にされた)

H23.9.15 ゴヨウマツ



円内:老齢幼虫(体長14mm)  
H23 7.28 ゴヨウマツ

老齢幼虫(体長19mm)

H23.7.28 ストローブマツ

## 1. 発生樹種

アカマツ、クロマツ、ゴヨウマツ、ストローブマツ、ヒマラヤスギ

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

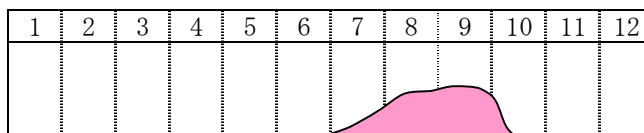
年2～3回の発生で、幼虫は5月から出現するとされるが、調査では7月下旬に老齢幼虫を確認しており、7月上旬に孵化したと思われる。

その後、8月下旬に発生した幼虫は、特にゴヨウマツで多発して大きな被害をもたらし、10月初旬にほぼ終息した。特に下方の枝に多発する傾向が見られた。

ストローブマツでも9月上旬～下旬に樹全体に多数が分布したが、大きな被害にはならなかった。

ゴヨウマツの被害が最も顕著となった9月上・中旬には若齢～老齢の幼虫が混在し、9月上旬には被害箇所に繭が点在したり、中旬には孵化幼虫が出現するなど、生活環は複雑である。

老齢幼虫の体長は約20mm、体色は光沢のある淡緑色で腹側は淡黄緑色、頭部は橙黄色で側面に目のように見える大きな黒斑がある。



## 3. 被害の特徴

食害は下方の枝で多く発生し、食べ尽くすと被害は上方の枝に拡大する。

若齢幼虫は葉を縦にかじるので、傷つけられた葉は褐色になって縮れて残るが、やや成長すると葉を全部食べてしまうので、多発した枝は丸坊主にされてしまう。

隣接するクロマツでは発生は見られなかった。

## 4. 対策

通常は少数の幼虫が点在する程度の発生であるが、大発生すると短期間のうちに葉を食い尽くすので、出来るだけ若齢幼虫期に薬剤散布する。



葉縁の組織内に産卵する成虫  
H22.6.21 チョウセンヤマツツジ



葉縁に産み付けられた卵  
H23.6.27 チョウセンヤマツツジ



孵化後間もない幼虫が葉縁を食害（体長3～4mm）  
H22.6.28 チョウセンヤマツツジ



葉を食害する中齢幼虫（体長16mm）  
H22.5.25 サツキ



食害により主脈のみが残るH23.5.24 チョウセンヤマツツジ



老齢幼虫（体長30mm）  
H22.7.16 チョウセンヤマツツジ

## 1. 発生樹種

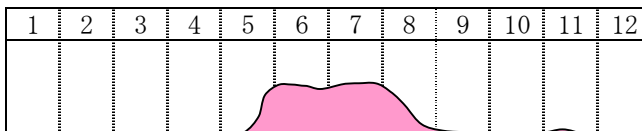
ツツジ・サツキ類

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

年3回の発生とされる。第1回は5月初旬に産卵、5月中旬に孵化して、5月下旬～6月中旬にかけて被害を拡大させる。第2回は6月中・下旬に産卵、6月下旬～7月上旬に孵化幼虫が出現する。次いで、8月上旬に産卵している様子の成虫を見かけており、これが3回目の産卵と思われる。その後、11月上・中旬にも少数の幼虫の発生を記録していることや、若齢～老齢が混在していることも多いことから、産卵等の時期はかなりばらつきがあると思われる。

孵化幼虫（3～4mm）は2週間位で20mmに成長し、老齢になると30mm近くになる。

体色は淡黄緑色～淡緑褐色で多数の小黒点があり、頭部は黄橙色（中齢までは黒）である。



## 3. 被害の特徴

若齢幼虫は、群生して葉の周辺部から食害し、主脈を残して食べ尽くす。

成長とともに分散し、食害量も多くなるので、多発すると樹全体を丸坊主にする。

センター内では、ツツジやサツキの植込みでは被害が点在する程度であるが、チョウセンヤマツツジの単木は毎年大きな被害を受ける。5月下旬と7月下旬の被害が大きく、第3世代による被害は軽微である。

## 4. 対策

産卵された葉は、周辺が膨れ、孵化後の若齢幼虫は群生するので、見つけ次第摘除する。

多発、分散した場合は、薬剤散布により防除する。



# アオバハゴロモ

カメムシ目（半翅目）アオバハゴロモ科



小枝に群生する幼虫 H23.6.24 サンゴジュ



H22.7.24 サザンカ(愛西市)

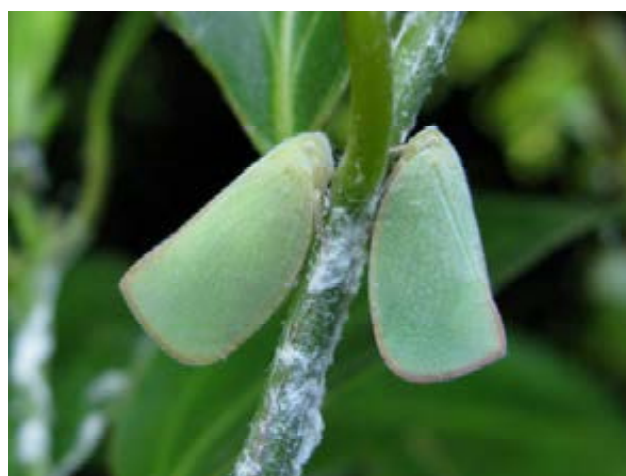


幼虫 H22.6.27 ソシンロウバイ(愛西市)



小枝に群がる成虫

H22.7.24 ヤブニッケイ(愛西市)



成虫

H22.7.24 ヤブニッケイ(愛西市)

## 1. 発生樹種

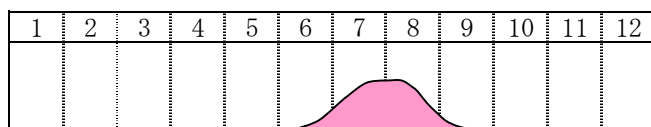
ツバキ、サザンカ、柑橘類、モッコク、アラカシ、クロガネモチ、ウバメガシ、カエデ、アジサイ、キンモクセイ、アオキ、カナメモチ、サンゴジュ、ナンテン、マサキ、ボケなど多種

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

年1回の発生で、卵で越冬する。6月中旬に孵化幼虫が出現するが、白い綿状物質に覆われているため、虫体は確認しにくい。7月中旬頃からは成虫が混在するようになり、次第に成虫ばかりになる。

垣根、庭木などの密植した風通しや日当りの良くない箇所の小枝に発生することが多い。

幼虫は体長8mm、淡緑色でやや扁平な体形をしており、成虫は淡青緑色で、羽をたたんで静止するので側面から見ると三角形に見える。



## 3. 被害の特徴

成・幼虫ともに枝葉から樹液を吸うため樹の生育が悪くなるとされるが、普通は多発することは少なく、吸汁害は問題にならない。むしろ幼虫が分泌する白色綿状物質が枝葉に付着することにより著しく美観を損ねる被害が大きい。

## 4. 対策

多発することは少なく放置しても良いが、美観上問題となる場合は、幼虫発生期に薬剤散布により防除する。

# オカボノアカアブラムシ

カメムシ目（半翅目）アブラムシ科



成・幼虫が混在して新梢に群生する本種

H22.5.28 ウメ



小枝の肌を覆い隠すほどに群生

H23.5.16 ウメ



6月中旬になると白く萎びた死骸が目立つようになる。

H23.6.16 ウメ



本種はいなくなったが、すす病が発生し、極めて汚い。

H23.6.20 ウメ

## 1. 発生樹種

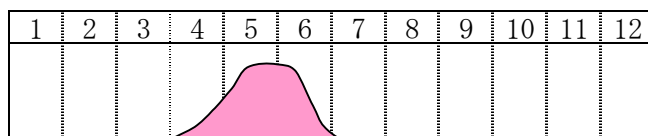
ウメ、モモ、スモモ、サクラ類、ナシ、ボケ、カリン、ハナカイドウ

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

一次寄主（主寄主又は冬寄主ともいう）のウメなどで越冬卵が4月上旬に孵化し、次第に増殖して5月中旬～6月上旬にピークとなり、6月中旬には二次寄主（中間寄主又は夏寄主ともいう）のイネ科植物などに移住する。

9月中旬には一次寄主に戻るとされるが、センターでは確認していない。

体色は暗赤褐色～汚黄緑色で腹部後半は赤色、各節の背面に帯状に蠟質白色粉がつく。



## 3. 被害の特徴

本種はウメの主要害虫で、新梢の葉裏や茎に群生して吸汁加害し、葉は裏側に巻縮する。また、新梢の伸長は著しく阻害され、葉の展開も悪くなり、果実の生育にも悪影響がある。下方の枝に多発する傾向があるが、低木では樹全体に及び、著しく美観を損ねる。6月中・下旬になると白く萎びた死骸が目立つようになる。

## 4. 対策

越冬卵から孵化が完了する4月中旬が防除適期となる。

薬剤散布により大半が死滅しても、一部が残存すると、急激に増殖して短期間で再び美観を損ねる。



# クリオオアブラムシ

カメムシ目（半翅目）アブラムシ科



太枝の下面に産み付けられた卵塊

H23.1.12 クリ



孵化幼虫は順次分散する

H22.3.17 クリ



左:有翅形 H23.5.16 アラカシ



小枝に群生して吸汁加害する

H22.10.8 シラカシ



日当たりの良い場所に群生、産卵の準備？

H22.11.26 クリ

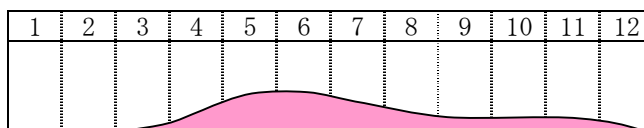
## 1. 発生樹種

クリ、クヌギ、カシワ、シラカシ、ウバメガシ、コナラ、ミズナラ、ベニガシワ、アラカシ

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

樹幹や太い枝の下面などで越冬した卵は3月中旬頃から孵化し始める。孵化幼虫は小枝に順次分散して吸汁加害する。5月中旬になると有翅胎生雌虫が多くなり、シラカシ、コナラ、ウバメガシなどに分散し、胎生で繁殖を続ける。11月中旬になると無翅両性雌虫と有翅雄虫が現れて交尾し、樹幹部等に産卵する。卵塊は普通5,000粒で、時には1万粒以上にも達するとされる。

成虫の体長は4～5mm、全体黒色で腹部はやや球状に膨れる。卵は長さ1.5mmの楕円形で、光沢のある暗褐色～黒色である。



## 3. 被害の特徴

多発すると新梢の伸長が抑制されるほか枝枯れなどを引き起こし、著しく樹勢が衰えるとされるが、むしろ枝等に群生することにより美観を損ねることの被害が大きいと思われる。

## 4. 対策

冬季に樹幹の南側や太い枝の下面など直接雨のかかりにくい場所に卵塊をつくるので、孵化までに除去すると有効な防除対策となる。成・幼虫が多発した場合は薬剤散布により防除する。

# ナシミドリオオアブラムシ

カメムシ目（半翅目）アブラムシ科



孵化後、間もない幼虫

H23.3.11 マルバシャリンバイ



左: H23.4.4 マルバシャリンバイ



上: ナシの主脈に並列して吸汁する  
H21.10.5 ナシ



左: シャリンバイに寄生する本種  
に比べ、淡色の群生  
H23.5.26 アズキナシ



左: すず病を併発して美観を損ねる  
H23.4.22 マルバシャリンバイ



有翅形が二次寄主から移住し、増殖するH23.10.24 マルバシャリンバイ



有翅形、成虫・幼虫、卵が混在する H23.10.24 マルバシャリンバイ

## 1. 発生樹種

一次寄主：ビワ、シャリンバイ

二次寄主：ナシ、セイヨウナシ、リンゴ

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

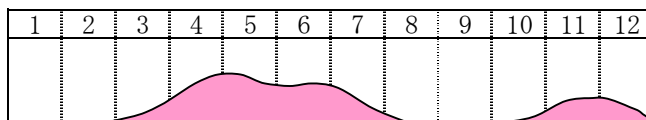
越冬卵が3月上旬頃から孵化し、一次寄主のシャリンバイの葉裏には幼虫や卵が混在する。

5月上旬頃から二次寄主に移行するらしく、5月中・下旬にはシャリンバイでは見られなくなる。

5月下旬頃からアズキナシに本種の群生が出現するが、アズキナシで見られる本種は淡色で透明感が強く、亜種？（アズキナシニッポンオオアブラムシ）の可能性もある。

10月中旬には再び一次寄主に戻って増殖するらしく、有翅形や無翅形の成虫・幼虫、卵が混在する。

体長は3mmで、体色は淡緑色、腹部背面に緑色の斑紋がある。有翅形は暗褐色で、腹部背面に顕著な白斑がある。



## 3. 被害の特徴

葉裏の主脈の両側に並列して吸汁加害する習性がある。被害としては、吸汁害よりも排泄物にすす病が発生して樹全体が黒く汚れるため、著しく美観を損ねることの被害が大きい。

## 4. 対策

葉裏に群生し、葉と同色のため見つけにくい、すす病が発生したら、葉裏を注意し、本種の寄生があれば薬剤散布を行う。



# ニシヤワタアブラムシ

カメムシ目（半翅目）アブラムシ科



他のアブラムシも混在して葉裏等に群生  
H23.5.2 ハナカイドウ



被害葉は裏側に巻く  
H22.5.2 ハナカイドウ



左:小枝に群生  
H23.5.13 カリン



裏側に巻いた葉の内側に群生する本種  
H23.4.22 ハナカイドウ



巻いた葉の内側に本種はおらず、ホソヒラタアブ(写真)に捕食されたと思われる  
H23.4.21 ハナカイドウ

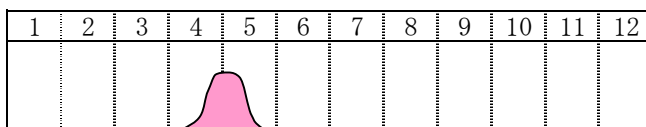
## 1. 発生樹種

リンゴ、カイドウ、ハナカイドウ、カリン

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

4月上旬に葉の裏側に出現し、葉は裏側に巻く。

虫体は黄緑色～暗緑褐色であるが、多量の綿状蠟質物で覆われているので、外見から体色は不明である。



## 3. 被害の特徴

被害は4月下旬から顕著になり、巻いた葉の内側には白色の綿状蠟質物に覆われた本種や、白色球状の液状物が充満し、極めて汚くなる。

醜い状況は、5月上旬まで続き、中旬になると減少するが、激甚な被害を受けた樹木は枯損につながることもある。

## 4. 対策

被害葉は次第に裏側に巻くので、出来るだけ発生初期に薬剤散布する必要がある。

# ニワトコヒゲナガアブラムシ（ニワトコフクレアブラムシ）

カメムシ目（半翅目）アブラムシ科



新芽に発生

H23.3.4 ニワトコ



葉裏に群生

H23.4.11 ニワトコ



H22.5.10 ニワトコ



新梢を覆うように大発生

H22.4.9 ニワトコ



右上：二次寄主に移住のためか、有翅形も混在

H23.5.13 ニワトコ

右下：本種を捕食するナミテントウの幼虫

H23.5.26 ニワトコ



## 1. 発生樹種

一次寄主：ニワトコ、セイヨウニワトコ（アルボマルギナタ）、ハクチョウゲ、ハゼ

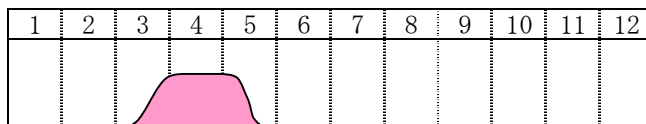
## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

3月上旬に、ほころびかけた新葉に出現する。平成22年は3月下旬～4月中旬にニワトコの低木全体に群生するほど増殖したが、23年はやや遅れて4月中旬～5月上旬に同様の状況となった。おそらく春先の気温が影響しているものと思われる。

5月中旬には二次寄主（中間寄主又は夏寄主ともいう）に移住するらしく、ほとんど見られなくなる。

10月下旬～11月上旬にはニワトコに戻るとされるが、確認していない。

体色は、光沢のある緑色、頭部は黄緑色～橙黄色で、腹部が膨れた体形をしている。



## 3. 被害の特徴

新葉の展開と同時に出現し、気温の上昇とともに増殖する。群生して吸汁加害するため、新梢の伸長はおさえられ、展開する葉もやや小さくなる。葉裏や茎を覆うように多発するため、極めて美観を損ねる。

## 4. 対策

3月上旬から新梢をよく注意し、発見次第、薬剤散布する。



# ワタアブラムシ

カメムシ目（半翅目）アブラムシ科



H23.4.28 ムクゲ



H22.5.2 ハナカイドウ



H23.5.13 ムクゲ



新梢の葉裏や茎に群生



H23.5.24 ミカン



本種は体色の変化が大きい

H23.5.30 ミカン

## 1. 発生樹種

ムクゲ、柑橘類、ザクロ、サルスベリ、クチナシ、レッドロビン、ハナカイドウ、ハクチョウゲ

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

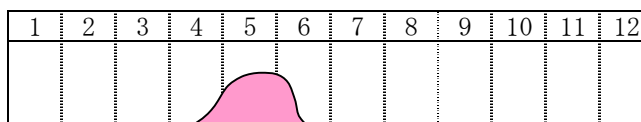
一次寄主（主寄主又は冬寄主ともいう）のムクゲなどで越冬した卵が4月上旬に孵化し、5月中旬にかけて増殖する。5月中旬には柑橘類にも出現し、短期間で増殖して6月上旬まで茎や葉裏に群生する。

6月中旬になるとムクゲでも柑橘類でも見られなくなるが、二次寄主（中間寄主又は夏寄主ともいう）に移住するためと思われる。10月中～下旬には再びムクゲに戻るようである。

平成22年には8月上旬～中旬に柑橘類で発生を記録しているが、柑橘類は本種の一次寄主なのか二次寄主なのか不明である。

体色は、黄色、橙黄色、緑色、濃緑色からほとんど黒色に見えるものまで変化がある。

ムクゲに寄生するものはほとんどが濃緑色～黒色で、柑橘類では多くの色の個体が混在する。



## 3. 被害の特徴

ムクゲの新梢に寄生して吸汁加害する。縮葉などの葉の変形はないが、新葉の展開は遅延し、樹勢が衰えるとともに、著しく美観を損ねる。柑橘類でも短期間で著しく増殖し、すす病を併発するため汚くなる。

## 4. 対策

きわめて短期間で増殖するので、発生を確認次第直ちに薬剤散布する。

## マツアワフキ

カメムシ目（半翅目）アワフキムシ科



H23.5.16 クロマツ



H22.4.30 シダレアカマツ



H23.5.24 クロマツ



新梢の基部が濡れて黒ずみ、極めて美観を損ねる

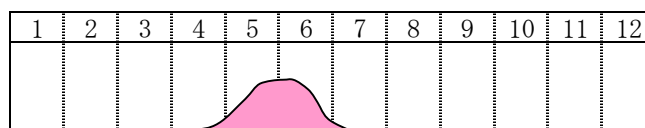
H23.6.9 ゴヨウマツ

### 1. 発生樹種

クロマツ、アカマツ、ストロブマツ、ゴヨウマツ

### 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

年1回の発生で、樹の組織内で卵越冬すると思われる。  
幼虫は4月下旬から現れ、新梢の基部などに泡のかたまりが付着しているのが見られる。  
常に体表から泡状物質を出すため「アワフキムシ」と呼ばれ、泡の中に棲んで樹液を吸汁する。  
幼虫の個体数は、5月中旬～6月中旬がピークで、その後は急激に減少する。  
老齢幼虫の体長は5～6mmで、頭胸部は褐色～暗褐色、腹部は橙黄色、やや扁平な体形をしている。



### 3. 被害の特徴

吸汁による生育阻害などの実害は少ないが、新梢の基部等が泡状物質で濡れて黒ずみ、多発すると樹全体に被害が及ぶため、大きく美観を損ねる。

### 4. 対策

幼虫は、動きが緩慢なので、泡状物質の発生を見つけたら、泡を除いて内部の幼虫を捕殺する。  
樹高が高い場合や多発の場合は薬剤散布による。



## ツノロウムシ

カメムシ目（半翅目）カタカイガラムシ科



成虫の周囲を動き回る孵化幼虫（薄茶色）  
（白い若齢幼虫は、既に定着？）

H24.6.26 クチナシ



長さ 0.4～0.5mm H23.6.29 クチナシ  
（白い点にしか見えない）



長さ 1mm H23.7.21 オオヤエクチナシ  
（肉眼でも形が分かる）



長さ 1～1.5mm  
H23.8.1 オオヤエクチナシ



長さ 5mm H23.9.26 クチナシ



長さ 1.5～2mm  
H23.8.11 オオヤエクチナシ



H23.10.14 ゲッケイジュ・オーレア

### 1. 発生樹種

ゲッケイジュ、柑橘類、クチナシ、ツバキ、サザンカ、サカキ、ナンテン、シデコブシ、モチノキ、アカメガシワ、ヒサカキ、コバノミツバツツジ、カキ、トウカエデ、モッコク、サンゴジュなど多種

### 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

年1回の発生で、雄は見られず、単為生殖で受胎した雌成虫で越冬する。虫体の下に産卵し、産卵数は5,000にも達する（文献）。主に枝に着生し、年間を通じて見られる。

6月下旬に幼虫の発生に気付くが、大きさは0.4～0.5mm位で、肉眼では白い点にしか見えない。

幼虫（の蠟質物）は、7月下旬に1mm、8月下旬に3mm、9月下旬に5mm、10月下旬に7mm程度に成長する。

雌成虫の蠟質貝殻は長さ約8mm、ほぼ円形で灰白色、わずかに淡紅色を帯び、背面中央に角状突起がある。カメノコロウムシに似るが、本種のほうが大型で、成虫では顕著な角状突起があるので区別できる。

### 3. 被害の特徴

主に枝梢に着生し、本種の排泄物にすす病菌が繁殖して、すす病を誘発するため著しく美観を損ねる。

### 4. 対策

灰白色でよく目立つので、見つけ次第、竹べらなどでこすり落とすことが最も有効である。

冬期のマシン油乳剤による防除は、当所の調査では効果を確認することは出来なかった。

幼虫発生期の薬剤防除も有効とされるが、白い点のように見える幼虫はすでに定着した若齢幼虫であり、薄茶色で動き回る孵化幼虫の発生期の散布が効果的と思われる。

# ルビーロウムシ

カメムシ目（半翅目）カタカイガラムシ科



肉眼では茶色に縁取られた白い点にしか見えない

若齢幼虫(0.3mm程度)  
H23.7.1 ゲッケイジュ



貝殻の径は1mm程度まで成長

H23.8.1 ゲッケイジュ



径は2～3mmに成長

H23.9.29 ゲッケイジュ



すす病を併発し極めて汚い

H21.9.9 モチノキ

## 1. 発生樹種

ゲッケイジュ、柑橘類、ツバキ、サザンカ、ヒサカキ、サカキ、モッコク、クスノキ、モチノキ、サングミズキ、シナヒイラギ、サルココッカ、ウメモドキ、カキ、ウバメガシなど多種

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

年1回の発生で、雄はほとんど見られず、単為生殖で受胎した雌成虫で越冬する（文献）。

多くは枝に着生するが一部は葉の中央葉脈に沿って付着し、年間を通じて見られる。

虫体の下に産卵し、6月下旬に孵化幼虫が多数小枝に点在するが、大きさは0.2mm程度で茶色に囲まれた白い点にしか見えない。8月上旬には1mm、9月下旬には大きいものは3mm程度に成長する。

孵化幼虫は緑枝に移動し定着する傾向があり、定着後は移動しない（文献）。

雌成虫の蠟質貝殻は長さ4～5mmで、比較的硬く、あずき色で、ひも状白色分泌物を出す。

有力な天敵ルビーアカヤドリコバチ（雌成虫の体長1.5mm）がおり、これに寄生されると介殻が黒色になるので、外観で分かる（文献）。

## 3. 被害の特徴

主に新梢や葉に着生し、本種の排泄物にすす病菌が繁殖して、すす病を誘発するため著しく美観を損ねる。すす病が激しくなると、ルビーロウムシ自体がすすに覆われてしまい、まともに成長できなくなる。

## 4. 対策

少発生であれば、竹べらなどでこすり落とすことが最も有効である。

冬期のマシン油乳剤による防除は、当所の調査では効果を確認することは出来なかった。

幼虫発生期の薬剤防除は、白い点のように見える幼虫に成長する以前の、茶色の孵化幼虫の段階での散布が効果的と思われるが、肉眼での観察はかなり困難である。

孵化幼虫の出現は6月中旬から7月下旬まで長期に亘るので、数回の散布が必要と思われる。



## ゲンバймシ類

カメムシ目（半翅目）ゲンバймシ科



クスゲンバイ

H21.10.5 クスノキ



シキミゲンバイ

H22.5.12 シキミ



トサカゲンバイ

H22.6.21 ヤクシマアセビ



ツツジゲンバイ

H22.6.8 ヒラドツツジ



上：ツツジゲンバイ被害  
（円内は葉裏）  
H23.8.18 ヒラドツツジ



ナシゲンバイ

H22.8.4 ハナカイドウ



プラタナスゲンバイ  
H23.7.1 モミジバズカケノキ

### 1. 発生樹種

クスゲンバイ：クスノキ、タブノキ、シロダモ

シキミゲンバイ：シキミ

トサカゲンバイ：アセビ、ネジキ、アジサイ、モクレンなど

ツツジゲンバイ：ツツジ・サツキ類

ナシゲンバイ：ナシ、サクラ、ボケ、モモ、ウメなど

プラタナスゲンバイ：プラタナス

### 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

多くは、年4～5回の発生で、落葉などの間で成虫越冬するものや、葉に産み付けられた卵で越冬する。4～5月から現れ、秋まで不規則な発生を繰り返す。

### 3. 被害の特徴

葉裏に群生して吸汁するため、葉の表面は白くかすり状になり、葉裏は虫の排泄物で黒く汚れるため、著しく美観を損ねる。

### 4. 対策

発生が不規則で、常に成虫と卵が混在しているため1回の薬剤散布では防除しきれず、7～10日おきに数回の散布が必要である。

# イセリアカイガラムシ

カメムシ目（半翅目）ワタフキカイガラムシ科



H23.3.8 オオユズ



H23.4.26 ナンテン(愛西市)



左:卵を捕食する天敵「ベダリア  
テントウ」の幼虫  
H23.5.2 レモン



天敵「ベダリアテントウ」の成虫 H23.4.28 オオユズ



成・幼虫が混在し、すす病も併発

H23.3.21 ミカン(愛西市)

## 1. 発生樹種

柑橘類、ナンテン、トベラ、モッコク、カキ、ギンヨウアカシア、ヒペリカムなど多種

## 2. 害虫の特徴（発生時期、形態等）

ワタフキカイガラムシともいわれ、古くから柑橘類の害虫として有名である。

年2～3回の発生で、成虫又は幼虫で越冬するとされるが、発生はきわめて不規則で、年間を通じて卵、幼虫、雌成虫が見られる。雄はほとんど発生しないとされる。

雌成虫の貝殻は楕円形で長さは約5mm、虫体は暗橙黄色で背面に黄白色のろう質物を覆い、光沢のある毛をもつ。成熟すると尾端に白色綿状の卵のうを形成し、その中に産卵する。

## 3. 被害の特徴

主に枝梢に寄生し、多発すると吸汁害のため樹勢が衰え、すす病を併発するため見栄えも悪くなる。

## 4. 対策

群生している枝梢を切除するか、貝殻をブラシ等でこすり落とすのが効果的である。

庭等では、散水時の水圧で簡単に落ちて、這い上がってくることはない。

薬剤散布は、幼虫発生期に行う必要があるが、幼虫の発生を見極めることは難しく、天敵（ベダリアテントウなど）も多いので、慎重に行う必要がある。

※ベダリアテントウ：オーストラリアに分布するが、イセリアカイガラムシ駆除のため、日本に持ちこまれ、そのまますみついた外来種